



田中里奈著

言語教育における言語・国籍・血統

在韓「在日コリアン」日本語
教師のライフストーリー研究

明石書店、2016年発行、274p.

ISBN : 978-4-7503-4309-9

三代 純平

1. 本書の目的と構成

本書は、著者の田中里奈が平成25年度に早稲田大学大学院日本語教育研究科へ提出し、博士の学位を授与された学位論文に加筆・修正を加えて刊行されたものである。本書の目的は、在韓「在日コリアン」日本語教師のライフストーリーから、「日本語＝日本人」という日本語教育に根強い観念を問い直すことである。著者は、4名の在韓「在日コリアン」日本語教師へのライフストーリー・インタビューを丁寧に分析することにより、今まで論じられることがなかった「在日コリアン」2世、3世がいかに韓国で日本語教師を続けているかを明らかにした。さらに彼ら／彼女らのライフストーリーから、日本語教育における「単一性志向」がいかに根強く社会に存在し、それが個々の意識に浸透しているのか提示して見せた。

本書は、4章から構成されている。第1章は、「日本語＝日本人」という思想の系譜を概観するとともに、言語教育における「ネイティヴ」／「ノンネイティヴ」の議論を俯瞰し、日本語教育が言語、国籍、血統に対して持つ意識の問題性を論じている。さらに、言語と国籍／血統との間にズレを持つ「在日コリアン」日本語教師に着目し、その歴史的背景を論じることで、研究課題を設定する。第2章では、本研究で採用したライフストーリー研究法と具体的な研究の過程について説明している。第3章は、調査協力者4名のライフストーリーを詳述し、それぞれの人生とそこから見える言語、国籍、血統に対する意識を明らかにしている。第4章は、本書のまとめとして、日本語教育の言語、国籍、血統に対する「単一性志向」の根強さ、並びにその虚構性を論じ、言語教育における「単一性志向」を乗り越えるための提言を行っている。

本稿では、まず本書の概要を述べた上で、本書の示す日本語教育における意義と課題について論じる。

2. 本書の概要

2.1 本質主義に対する異議申し立て

第1章は、本書の研究課題を設定するための先行研究レビューを目的とした章である。日本語教育には依然として「日本語＝日本人」という思想が根強く、日本社会は画一的な「日本社会」「日本人」によって構成されているという「単一民族神話」の上に日本語教育が行われていると田中は批判する。それは、「日本人」「日本文化」が本質的に存在するという価値観の基に日本語教育が行われていることに対する異議申し立てと言えるだろう。田中は、その異議申し立てのために、「国語」「母語」という概念がいかに構築され、そこにいかなる問題が潜んでいるかを先行研究から論じる。また、「日本語＝日本人」という構図を脱構築するために、「日本語」のネイティブスピーカーでありながら、国籍や血統上は「日本人」でない「在日コリアン」が日本語教師をすることの意味に着目する。第1章では、主に「在日コリアン」の歴史と彼ら／彼女らのアイデンティティをめぐる先行研究がレビューされている。また、本書で在韓「在日コリアン」日本語教師のアイデンティティを理解するための理論的枠組みとして、スチュアート・ホルのポジショナリティ（位置取り）の議論が取り上げられている。

2.2 日本語教育におけるライフストーリー研究

第2章では、ライフストーリー研究法の背景、具体的な研究手続きについて述べられている。そして、それを踏まえた調査概要が説明されている。田中は、質的研究として「客観性」「妥当性」などの代わりに「透明性」「信憑性」を担保するために、調査過程の開示を重視している。研究者自身のポジショナリティの変化や、リサーチクエスションの明確化についても丁寧に記述されている。

2.3 在韓「在日コリアン」日本語教師のライフストーリー

第3章では、在韓「在日コリアン」日本語教師V、L、E、D、4名のライフストーリーとその解釈が詳述される。在日2世である教師Vは、「在日コリアン」というカテゴリーを戦略的に見せることで、韓国名を名乗りつつ「正統な日本語のネイティブ」ということを示し、韓国の日本語教育の中で自身の位置を確立させようとしていた。そのストーリーから「日本語のネイティブ」でありながらも「日本国籍や日本名をもたない」ゆえに「正統な日本語のネイティブ」という評価を受けることが難しいという葛藤がわかる。

在日3世である教師Lは、「韓国にも日本にもどちらも完全には属したくない」というアイデンティティを表明するために、本名の姓と本名の名を日本語読みした名前を使用している。そこには、自身がネイティブ教師であることを戦略的に示す目的がある一方、「日本語」は「日本人」によってのみ話される言語ではなく、言語や国民の境界はもっと複雑なものであることを学習者に伝えたいという教育理念もある。

在日3世の教師Eは、日本で20年間通称名のみで生活しており、韓国では、通っている大学院で本名を用い、日本語教師としては通称名を用いるという使い分けを行っている。それは、日本語教育の現場で日本語のネイティブなのに韓国名なのはなぜかといった

説明要求を回避するための手段であった。教師Eにとって「日本語」は「言語資本」であり、その資本が最も高く評価される提示の仕方として通称名の使用が選択されたのである。

在日3世である教師Dは、日本ではほとんど通称名は使用していなかったが、韓国の日本語教育現場では、所属機関の要望により通称名を名乗らなければならなかった。そんな教師Dは、最初、「日本人教師」としてふるまうが、学期中盤で「在日コリアン」であることを「カミングアウト」という。そのことで、「日本語話者＝日本人」という枠組みを問い直すことを実践しているのである。

以上4名は、多様な背景、多様な価値観に基づいた、多様な位置取り、アイデンティフィケーションを行っている。一方で、「日本語＝日本人」という図式から外れていることにより、「正統な日本語のネイティブ教師」ではないというまなざしと葛藤してきた。田中は、このことから、日本語教育、あるいは言語教育の抱える根強い「単一性志向」の存在を指摘し、その「単一性志向」を問い返し、脱構築していくことの重要性を指摘する。

3. 本書の意義と課題

3.1 多様な日本語教師の現実とアイデンティティを描く

本節では、本書の意義と課題について述べる。まず、本書において最も興味深く、日本語教育の貴重な財産となるのは、田中が聞き取り、記述した4名の日本語教師のライフストーリーである。日本語教師の教育観を軸とした教師のライフストーリー研究は近年多く見られるが、日本語教師の人生全体、そしてアイデンティティの問題から日本語教師のライフストーリーを論じた研究はいまだ多いとは言えない。日本語教師は、多様な環境、多様な立場で「日本語教師」という職業を選択し、4名の在韓「在日コリアン」日本語教師がそうであったように、さまざまな社会からの要請や職場での権力関係に葛藤しながら教壇に立っている。この実態を共有することが現在の日本語教育の一つの課題である。理念や教育観から日本語教育が何かを論じることは非常に重要であるのは間違いないが、同時に、社会に埋め込まれた「日本語教師」という職業の実態を知ることも同様に重要である。そのような視点の研究が日本語教育には不足している。本研究は、韓国における日本語教育を知るための記録として大きな価値を持っている。

また、4名の豊かな経験、そして、田中の丁寧な解釈は、読者に自身の日本語教育経験を振り返り、その日本語教育観を問い直すことを促す。4名の葛藤の経験と田中の自身への批判的まなざしは、読者の心の底にある単一性志向を意識化し、反省を迫ってくる。

3.2 日本語教育学としてのライフストーリー研究のモデル

三代(2014)で論じたように、近年、日本語教育においてライフストーリー研究が急増している。一方、その方法論は未確立で、インタビュー・データとしての「ライフストーリー」を使用し、それを漠然とまとめているものや、伝記と類似した意味で「ライフストーリー」という用語を用い、聞き取ったデータをストーリーにまとめ上げたものを「ライフストーリー」と呼んでいるものも多い。どの方法が良くて、悪いという単純な議論ではないが、自身の研究と方法論の関係性を自覚的に論じることが質的研究者には求められてい

る。その意味で、本書は、日本語教育学として行われたライフストーリー研究の一つのモデルとなりうる。田中は、研究の「透明性」「信憑性」を重視し、インタビューの過程、解釈の過程を丁寧に描いている。また、語りの内容とあわせて、語り方にも着目し、小さな語り方についての違和感から語りを掘り起こし、解釈を深めることで、調査協力者の葛藤を描き出している。その解釈と記述は秀逸である。日本語教育学としてライフストーリー研究に取り組む際に、その手法、記述方法共に、一つの指針となる研究である。本書は、その研究内容に加え、研究方法においても日本語教育に対して大きな意義を持っていると言えるだろう。

3.3 現場に届く声

一方、本書にもいくつかの課題がある。最も大きな課題は、本書が提示した研究課題にあるように思われる。田中自身も、以下のように述べている。

…安易にも、“《言語》と《国籍／血統》とのズレという単一性から逸脱した属性をもってさえいれば”、つまり、“「日本語のネイティブ」だが「日本人ではない」という属性をもってさえいれば”、“日本語は日本人のものだ”といった「日本語＝日本人」という図式の再考を、身をもって学習者に迫っていくことができると考えていた。(p.237)

また、そのような自身が研究に持ち込んだ「構え」を批判的に振り返る。

このことは、言語＝国籍＝血統という考えが非常に根強く、それによって困難や葛藤を抱えざるをえない教師たちの置かれた状況に対する筆者の想像力が完全に不足していたことを意味している。(p.238)

田中は、この振り返りから、田中自身にも蔓延っている「単一性志向」の根強さを論じている。本書の別個所では、学会で、なぜ（「在日コリアン」ではない）田中がこのテーマを取り上げたのかをしばしば指摘され、逡巡する過程も記述されている。田中は、批判的に自己を省察することで葛藤を抱えながらも答えを出していく。その記述には納得する部分も大きい。ただし、最後まで田中は、意識的か無意識的かは定かではないが、この研究課題自体の安易さと暴力性について論じ切っていない。なぜ、「在日コリアン」に「日本語＝日本人」の構図の脱構築を求めたのか。そこにズレがあるからと繰り返し説明されるが、この理由はやはり安易であり、そのような定位自体が本質主義的であり、暴力的であるとさえ思われる。筆者も韓国の高校で教えていた経験があるが、「日本人」として「日本語」を教えること、また「日本人」が「韓国人」に対して、多様性を主張することの意味を、社会の中で、歴史の中で、常に問い詰められてきた。その経験を省察すれば、「在日コリアン」という存在を利用し、「日本人＝日本語」という関係を脱構築しようとは思わなかったのではないだろうか。学会での質問もそこに向けられていたのではないかと推察する。さらに推察するならば、田中自身も調査過程でそのことに気が付いていたのではないか。だからこそ、このような丁寧な考察で、4人のライフストーリーを見事に描けたのではない

だろうか。

関連する課題を述べると、田中の問題意識に、日本語教育には「日本語＝日本人」という意識が根強く、それを批判的に検討する研究の蓄積が必要であるというものがある。本研究もその一つとして意義を持つと論じている。前述したように、本書を読むと日本語教師である読者は自身の意識や経験を批判的に振り返ることになる。その意味で、田中の主張は一定の説得力を持つし、本研究は、田中が意図した価値を持っている。だが、一方で、そこまで、「日本語＝日本人」を前提として日本語教育に携わっている日本語教師は多いだろうか、という疑問も覚える。また、このような前提を批判した研究は本当に不足しているのだろうか。著者が第1章で取り上げているように研究の蓄積はある。それでも依然として問題があるとしたら、なぜか。たしかに研究や教材などの言説を分析すれば、そこには「日本語＝日本人」という前提を批判できるかもしれない。教師や学習者の語りを分析することで無意識にある単一志向性の問題を指摘できるかもしれない。そして、それも十分に意義のある研究かもしれない。しかし、このような前提と葛藤しながらも、多文化共生の理想と同化圧力の矛盾と向き合いながら、それでも日本語を教えている現場もたくさんある。自分たちの行為が100%正しいとは思っていない。だが、目の前にある状況に対処するためにできることをする。そこで、日々葛藤している現場に届く声とは何か。このことと真摯に向き合わず、本質主義批判を展開すると、そこに研究者と教師というような別の権力関係が持ち込まれてしまう。本質主義への異議申し立てが十分に機能していない理由は、言説の持つ実践性、あるいは言説の消費のあり方への議論の不足があるからだと言者は考えている。

本書における田中の提示した結論は、データの緻密な解釈に基づき、一定の説得力があり、納得のいくものである。しかし、同時に既視感も覚える。最初の研究課題に引っ張られ、やや安易な日本語教育への示唆を論じるとどまってしまったのではないだろうか。だが、田中の記述した4名のライフストーリーは、そのような結論をはるかに超えていくリアリティがある。このリアリティをいかに現場の知見と結びつけ、日本語教育学としていくか。ここに、今後の日本語教育学のライフストーリー研究の課題がある。そして、田中は、その課題に答える可能性を持つ数少ない日本語教育学のライフストーリー研究者であることは間違いない。田中の今後の研究の発展に期待したい。

参考文献

三代純平(2014)「日本語教育におけるライフストーリー研究の現在—その課題と可能性について」『リテラシーズ』14、pp.1-10

(みよ じゅんぺい 武蔵野美術大学造形学部)